



No. '20-4
(No.103)
Oct. 2020

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

1.	80日間世界一周航路	菊池善次郎	2
2.	ISGG 活動の思い出	小西 恒男	8
3.	人生の分岐点と人の出会い	稲葉 尚子	13
4.	極東の神秘の国で真（まこと）の 自分と会うことを望んだ若者 —第一話—	榊原 教子	16
5.	椎の実	石田 泰嗣	20
	〔事務局便り〕		21
	〔編集後記〕		22



80日間世界一周航路



会員 菊池善次郎

新型コロナウイルス感染症が世界中で流行し始めてから早くも10ヶ月が過ぎました。日本では感染拡大がややスローになった様には見えますが世界的に見ると「収束からはほど遠い状況（毎日新聞）」です。前号 NEWSLETTER で「世界のコロナ感染者 1,300 万人、死者 57 万人」と書いたところですが、3ヶ月過ぎた現在「感染者（累計）3,800 万人超、死者約 109 万人（10 月 15 日）」と増加の一途をたどっています。日本に於いても感染者（累計）9 万人超、死者約 1,600 人（10 月 15 日）とまだまだ増え続けている現状です。

そんな中私達は「ウィズコロナ」「ニューノーマル」な自粛・制限の多い生活を余儀なくされ、相変わらず新聞・テレビはコロナ関連ニュースが途切れることはありません。

コロナ禍の中、いろいろ考えたり、不思議に思ったり、書きたいこともあります、今回は全くコロナには関係ない「オールドノーマル」な、私の古き良き時代の一端を、懐かしみながら綴って、しばしコロナ禍を忘れたと思います。

今から 40 年近く前、私はスピカ(MV SPICA)と云う自動車を専門に運ぶ船（自動車専用船）に乗ってビルマ人船員（現ミャンマー人）と一緒に世界を回っていましたが、その時の話からです。航路は西回りで世界一周航路、日本から日本に帰るまで丁度 80 日程かかりました。私は 42 才、一等航海士の時です。以下、当時の日記帳から思い出すままに。

◆本船概要：

船名：MV SPICA 船籍：パナマ

総トン数：約 1 万 3,000 トン 長さ：200m



ドイツ ヴェーゼル川(Weser R.)河口付近を
航行する本船(現地メディア撮影)

スピード：19ノット 車積載台数：4,500台

乗組員：日本人・・・船長/オフィサー 11名

ビルマ人・・・クルー 18名

乗組員合計 29名



ビルマ人クルーと共に
(本船上にて)

◆西回り世界一周航路（概要）；

右図参照。

日本では主に名古屋港でトヨタ車を満載、一路南へ。マラッカ海峡、インド洋、紅海を経てスエズ運河へ（ここまで約18日間）。

その後地中海を西航、ジブラルタル海峡を抜け欧州最初港（ロッテルダム等）に到達（スエズから約9日間）。



日本から欧州水域まではスエズ運河通航以外何処にも寄りません。そして欧州/北欧の複数の港で日本車を全て陸揚げします。その航海により違うけれど、シェルブール（仏）、ロッテルダム、ブレーメルハーフェン（独）、アントワープ（ベルギー）、コペンハーゲン、ドラメン（ノルウェー）、ゴッテンブルグ（スウェーデン。エーテボリの別称）などの諸港です。

日本車の後は欧州水域でベンツ、サーブ、BMW等欧州車を積載（本船運航会社が外国船社に変更）、大西洋を経てアメリカ東岸諸港、そしてパナマ運河を通過してアメリカ西岸諸港で欧州車を降ろし、同時に又、アメリカの中古車を積んで、太平洋を越え日本に帰ってくる、おおよそそんなイメージの西回り世界一周航路でした。

纏めると、日本～欧州 (via Suez Canal)・・・約 26 日

大西洋横断・・・・・・・・・・約 10 日

アメリカ東岸から西岸 (via Panama Canal)・・・約 13 日

太平洋横断・・・・・・・・・・約 10～12 日

欧州諸港や北米諸港での揚荷/積荷・・・計約 20～21 日

日本から日本まで地球一周の日数はおおよそ 80 日間の航路でした。

◆ビルマ人船員について；

7 年前の NEWSLETTER に“ミャンマー(Myanmar)”について書いたところですが、その中でビルマ人船員についても触れましたので今回詳細は省略します。

80 日間 X 2 航海＝約半年、寝食を共にした彼らです。技術的にはまだまだと云う感じでしたが熱心な仏教信者が多く、温和/ソフト/従順/真面目/真摯なところは日本人と相通じるところあり。云われたことは一生懸命やって、船内にトラブルはなく、ある意味楽しい毎日でした。

仕事以外で彼らの異文化にも触れることが出来ました。例えば、Off duty 時のビルマ民族衣装ロンジー着用スタイル（巻きスカート姿）。日本人が和服を好むのと同じ様に何かリラックスすると云う。

ビルマの伝統的遊戯、蹴鞠^{けまり}（チンロン）プレイ。使用済み細いプラスチックバンドを器用に編んで直径 15cm ぐらいの鞠^{まり}を作り 4～5 人で楽しんでいました。日本では平安貴族の遊びだったのに……。

小さな手作りの仏像やお釈迦様の写真を自分の部屋に置いて毎朝水を供える習慣は日本人も真似るべきか。ビルマの旧正月に行われる最大の行事“水かけ祭り”については以下にやや詳しく。

◆ビルマの水かけ祭り（テインジャン）；

南シナ海を南下していた 4 月 17 日（1982 年）午前 8 時前、ブリッジでコーターマスター（操舵手）と 2 人で当直しているとボースン（甲板長）のウー・セイン・タンがやって来ました。何故か手にバケツと小さなひしゃくを持っている。

「チーフ、ちょっと水をかけていいですか？」「えッ？何？何？」「チーフ、今日はビルマの正月で近くの人と水をかけ合い、お互いお清めして幸せが来ることを願う日なのです」「なるほど。なるほ

ど。了解。それでは、どうぞ。頼みます」。そしてボースンは水で私の制服やズボンが濡れるのを申し訳なさそうに、少しだけ、バケツの水をかけ儀式を終えました。水にはほんの少し香水が入れてあったのか後で制服からいい匂いが漂っていました。

ビルマの伝統的“水かけ祭り”は『仏教の教えに基づき仏像や仏塔をお清めしたり、家族内の年長者の手に水をかけてお清めし、相手に敬意を示すことから発した。ミャンマー最大のお祭り。毎年旧正月（4月17日頃）の前の4～5日間開催』と云うことです。

◆ビスケー湾のおおしけの時化

船乗りにとって時化は「嫌い!」。七つの海の中で北極海（北氷洋）と南極海（南氷洋）は行ったことが無いので分かりませんが、船乗りの嫌う海（^{うみ}洋）が三つあります。冬の「北太平洋」、冬の「北大西洋」、モンスーン時季の「インド洋」です。いつも決まって海が大荒れするからです。大型船でも毎日毎日、グラグラ、ドタンバタンの連続の日が多いからです。本船での冬の北太西洋の様子は7年前のNEWSLETTERに書いたところですが、その時のあまりの時化にビルマ船員の何人かは自主的にライフボート（救命艇）の近くに集まり Abandon ship となるのではとビッていた程でした。

もう一つ船乗りの嫌う海域があります。それは地中海からジブラルタル海峡を越え欧州海域へ向う途中の右側、スペイン/ポルトガルのあるイベリア半島の付け根、と云うか大陸がネズミが大きくかじった様な形にえぐられている海域です。ビスケー湾（Bay of Biscay）と云います。ここの冬場の大荒れも有名です。本船は2月中旬この海域を通過しましたが北西の大きなうねりと強風で船は20度も右に傾き、ドタンバタンしながらの航海でした。近くにコンテナ船と冷凍貨物運搬船がいましたが同じく大変苦労して航海している様子が見えました。



ビスケー湾は何故大荒れする？北大西洋直結の海域で発達した低気圧が冬場は多く通過することと大陸が大きくえぐられた形で広々とした「大洋」と変わらないこと、そして最近 NHK プレミアム番

組でも紹介されていた様にビスケー湾付近の海底の形状（水深5千メートルの海が急に浅くなっている）が大きく影響し高波が発生しやすいと考えられています。

◆国際日付変更線

古い古い映画ですが“八十日間世界一周”（Around the World in 80 Days）見ましたか？私はテーマ音楽も好きでラジオでよく聴きました。物語は『ロンドンの一人の金持ち紳士が80日間で世界を一周出来るかどうか仲間と賭けをし、東回りで地球一周の旅に出ると云う話です。ロンドンを出発、バルセロナ、マルセイユ、スエズ、ボンベイ、HK、横浜、SF、ニューヨークと巡り、途中いろいろな出来事に巻き込まれながらも何とか世界を一周しロンドンに帰ってきます。しかし、毎日つけていた彼の日記帳によると約束の80日を1日オーバーしてしまっていました。彼は賭けに負け全財産を失うことになる、と諦めるのですが、そのことを恋人に話すと、どうも話が合わない。恋人の示したカレンダーの日付は彼の日記帳の日付と1日狂っていたのです。つまり、カレンダーによると仲間に約束した80日目の日が今日だったのです。彼は大慌てで仲間に約束通り帰ってきたことを伝えます。

そして彼は賭けに勝ち、財産を失うこともなく、又、恋人とも結婚でき、目出度し、目出度し』、と云う筋だったと思います。

お分かりだと思いますが、この物語の作者が国際日付変更線（ほぼ経度180度の線。少しずれている海域あり）のトリックをうまく使った楽しい話です。旅をしたイギリス紳士は日付変更線を越えたとき日記の日付をダブらせることを忘れていたのです。もっとも物語の舞台となった時代、日付変更線について一般には知られていなかったと云うことです。

さて、私の場合はどうだったでしょうか。具体的には日付変更線を本船スピカは1982年4月2日（最初の航海）と6月27日（次の航海）に越えました。越えた次の日はそれぞれ何月何日でしょうか？

答えは4月4日と6月29日です。映画の物語と違って私の場合は西回りの航海ですので日付変更線を東から西に通過、従って4月3日と6月28日は消滅します。私の日記帳は空白のページに「消滅」の文字が書かれています。

国際日付変更線図



20 歳代の頃ニューヨーク航路の貨物船に乗って何回も太平洋を横断し、行きも帰りも日付変更線を越えました。その都度私の日記帳は日付がダブったり（往航）、消滅したり（復航）しています。船のログブック(Log book 航海日誌) 上も同じことです。往航は同じ日付の (A) 日と (B) 日があり、復航は日付が 1 日跳ぶ（消滅する）ことになります。

もう少し云うと、これまでの私の人生の中で皆さんにはあるけれど私には存在しなかった日付が多くあると云うことです。反対に皆さんはその日は 1 日しか無いのに私には同じ日付けが 2 日も続けてあったと云う日が多くあるのです。

◆ニューヨーク港入口の灯船

「灯台」と云えば城ヶ崎海岸門脇埼灯台や川奈埼灯台の
の
の様に断崖絶壁の上の白い塔（建物）と云うイメージで
す

が、アメリカ東岸や欧州（オランダ、ドイツ）の海岸の
如



く陸地が低く、遠浅/砂地の海岸では灯台の代わりに「灯
船(Light-ship)」をよく見かけました。大きな船に灯台と
同じ様に光を発する構造物を乗せ、船を錨で海底に固定し
て灯台と同じ役目をさせるというものです。日本では昭和

40 年代初めまで東京港の入口に「東京灯船」と云う「灯船」がただ一隻ありました。

写真はニューヨーク港の入口（陸から遥か沖合）に設置されていたアンブローズ灯船(Ambrose light-ship)です。陸地が低く顕著な目標物がない海域で浅瀬や自船の位置を確認するのに苦労している時、この Light-ship を視認すると安堵したものです。又、ここでパイロット(Pilot 水先案内人) が乗船し本船を港の奥まで安全に嚮導きようどうします。若い頃ニューヨーク港に来る機会が多かったし、又、会社の NY 支店勤務もあったので、ニューヨークは懐かしく、親しみが有り、Ambrose light-ship が見えると「ああ、又、ニューヨークに来たか」と云う何か安堵感の様なものを感じたところです。

時は経ち、時代は変わり、船にも近代化/IT化の波が押し寄せ、電波・電子計器が多く導入され、灯台や灯船の役目はどんどん少なくなりました。Ambrose light-ship も含め「灯船」は今や世界の海からほとんど姿を消してしまいました。

長くなりましたので今回は一先ずここまでとします。

ISGG活動の思い出



会員 小西 恒男

2020 年度 ISGG の総会において永年勤めてきた ISGG 事務局長を退任致しました。

今年はコロナウイルス感染防止の影響で、会合なしに書面による総会となりました。

会員の皆さんと顔合わせが出来ない状態で、ご挨拶が遅れてしまいましたことを最初にお詫び致します。

また、7 月のイチゴサロン（例会）では稲葉会長より感謝状を頂きました。思いもかけぬサプライズに大変な栄誉で感激しました。改めてここに感謝とお礼を申し上げます。

2000 年 1 月伊東の人間になって、最初に入会した伊東国際交流協会の活動を通じて、黒岩正忠さんに会ったのが縁で ISGG を知り入会しました。そこで ISGG 会長であった稲葉尚子さんを知り、長い付き合いが始まりました。

ISGG の最初の活動は、2001 年、SGG 全国大会が下呂温泉で開催され、伊東から菊池善次郎さんと私（2 名）が参加しました。各 SGG の活発な活動に刺激を受けたことが忘れられない思い出です。

余談ですが今年 7 月の集中豪雨で下呂温泉の様子がテレビで放映されており、橋のそばにあるホテル「水明館」が映されていました。SGG 大会の会場

であったことが懐かしく思い出され、災害に
会わなかったかどうか心配しています。

2001 年黒岩事務局長の後任として事務局を
引き受けました。会員の皆さんと共に楽しく活動を
推進することを念頭に、会の活動に関与してきました。



2016 年発行の ISGG 創立 25 周年記念誌は、**SGG 全国大会（東京）で**
過去の活動を知るうえで大変重宝です。冊子の頁を
めくりながら私自身の活動の思い出を以下いくつか紹介してみたい。

1) 「通訳 110 番」について

来日外国人が伊東でトラブルを抱えた場合のサポート対策として何かいい方法がないかとの
提案に対し「通訳 110 番」を考えついたのは 2002 年のことであった。

「イチゴサロン」（月に 1 度の会員間の連絡会議）で、出席者の間で何度も内容を検討し、会員
の名前と連絡先、対応出来る外国語を記したリストを作成し、通訳 110 番と命名した。

外国語で困った関係機関に対し対応できるように、伊東市観光課を通じて市内の旅館・ホテル
などにこのリストを配布してもらった。

配布だけでは心もとないと判断し、後日稲葉会長と二人で、主な旅館・ホテルやペンション組
合などを回り、趣旨を説明して回ったことが懐かしく思い出される。

この通訳 110 番の対応で忘れられない思い出がある。

2005 年初夏の夕方、食事が終わってのんびりしているところへあるホテルの支配人から電
話がかかってきた。香港からのお客のクレームで困っており、こちらの意図が先方に伝わらない
ので助けてほしいとのことであった。すぐ駆けつけて話を聞いてみると、ホテルに預けていた
キャリーバッグのキャスターが壊れていたのを弁償してほしいとのこと。

話し合いの結果、ホテルの誠意が伝わり無事事態を収めることが出来た。

帰り際に支配人から謝礼として封筒をいただいた。「ボランティアなので必要ありません」

と丁寧に辞退した。しかし後になって「会の資金として貰ってもよかったのでは」と後悔した。

この後悔が忘れられない思い出である。

その後、私を含め会員が町で見かけた外国人に積極的に近づいて話しかけるようになったのは大きな成果であろう。この制度は I S G G の活動のひとつとして定着し、現在も続いている。

2) I S G G ニュースレター再刊について

I S G G の会報はそれまで黒岩正忠（事務局長）が不定期で刊行していた。これを定期的に発行する機運が盛り上がり、イチゴサロンで内容を検討し、編集委員を設けて対処することになった。そして 2003 年度 4 月、「I S G G NEWSLETTER」として再発刊した。

最初の編集委員は菊池善次郎さん、加藤福四郎さんと私の 3 人でスタートした。

リーダーシップをとってくれたのは菊池さんで、会報の様式、タイトルや文章のフォントなど基本的体裁を整えて貰った。加藤福四郎さんが原稿の集計や編集後記などを担当、私は事務局便りを受け持った。

現在稲葉会長、曾我さん、加藤達雄さんのチームワークで充実した内容の会報が会員と関係個所に届けられているのはご承知の通りである。

3) 「3 S G G 合同研修会」成立の経緯

静岡県内で JINTO に所属する善意通訳の会（S G G）は、熱海（ASGG、後に AGC）、下田（IZUSGG）と ISGG の 3 団体がある。

各 SGG は設立以来、今まで連携で目立った活動はしていなかった。

2003 年、伊東市（正確には伊豆東海岸国際観光モデル地区整備推進協議会）より稲葉会長に 3

団体が合同で活動することについて検討するよう提案があった。

これを受けて ISGG で検討し当会が旗振り役になって活動を推進することにした。

2004 年 3 月「3SGG 合同研修会」の名称で
伊東市役所で第 1 回目の会議を開催した。

熱海、下田、伊東 3 団体の会員 22 名が出席した。

研修会は翌年以降毎年 1 回のペースで、

各団体がローテーション方式で実施することを申し合わせた。

当日は特別講演会を設け、小田原箱根 SGG(OHSGG) の池田百合子会長を講師に招いて OHSGG の活動状況を紹介していただいた。池田会長とは毎年 5 月 3 日に小田原で行われる「北条 5 代祭」のパレード見学に 2000 年より毎年伊東にホームステイ中のタイの大学生数名を連れて行き、案内をしていただいている関係で繋がりがあり、今回の講演会に来ていただいた。

この合同研修会はお承知の通り熱海(AGC)⇒下田(IZUSGG)⇒ISGG の順序で毎年実施している。



3 SGG 合同研修会

4) K's サロンの実施の経緯

2011 年、伊東に「K's ハウス伊東温泉」(旅館)が
新規にオープンし、外国人宿泊者が飛躍的
にアップした。ISGG は K's ハウスと密接な連携を
保ちながら宿泊外国人のガイドを行ってきた。



K's ハウスでのパーティー

お陰で 2011 年以降 ISGG の外国人ガイド実績が飛躍的に増大した。

2017 年 6 月頃のある日、外国人との交流を増やす方法が何かないかといったテーマで曾我さんと雑談をしていた。この単純な会話が K's サロン誕生のきっかけとなった。

曾我さんから「K's ハウスのゲストと話す機会が作れないか？」との投げかけがあった。良い

アイデアだと返事をして別れたが、気になったので帰る前に K' s ハウスに立ち寄ってみた。たまたま岡部マネジャーがいたので、ゲストとの meeting を提案したところ、場所を提供するので月に1度くらいのペースでやってみては。k' s ハウスには ISGG メンバーに岩村君がいるので彼を窓口にすれば良いとの返事をもらった。

これが引き金となって第1回目の「K' s サロン」を開催した。

6月27日7:00PM 稲葉会長以下会員5名がK' s ハウスを訪れ、約2時間その日宿泊の外国人数人と会話を楽しんだ。

以後毎月1回外国人宿泊者の多い日を岩村会員に設定してもらい、外国人と一期一会の出会い (once-in-a-lifetime opportunity) を楽しんでいる。ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、アフリカなど世界中の国の人と出会って意見を交わす会話は結構楽しい。

言語は英語主体であるが、色々な人種に遭遇する機会が生じる。特にドイツ語圏では稲葉会長が、スペイン語圏では加藤達雄さんが生き生きと会話をしているのは見ていて楽しい。伊東に来て自国語で会話ができるのはゲストにとっても嬉しいことに違いない。

会話の中でガイド依頼があり、翌日市内ガイドをするケースも実際に起こっている。

18年間の長きにわたり事務局を担当して来ました。

ISGG20周年・25周年の記念行事など多くの活動を

会員の皆さんと一緒にやって行ってきたことが

思い出されます。



英語サロン

稲葉会長をはじめ、会員の皆様方のご協力をいただいて楽しく活動が続けることが出来ました。

今後は会員として会の活動に携わっていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

人生の分岐点と人の出会い



会長 稲葉 尚子

「人生の分岐点」という大きな題を掲げてしまいましたが、もちろん誰の人生でも「分岐点」というのはあると思います。一番大きな分岐点は結婚かもしれませんが、「もし〇〇に会わなかったら・・・」「もし〇〇していたら・・・」という分岐点は私の人生の中でもたくさんあります。

私はピアノ教師の母の強い意志に洗脳されたのか、幼い頃から自分はピアノの道に進むしかないと思い込んで育ってきました。生活の中心にはピアノがあり、練習とレッスンを価値観の第一に置くことに何の不思議もなく10代を過ごしました。

音大に入った年の年末、NHKの特別番組で「今年来日した音楽家特集」を偶然見て、そこで Andre Watts というアメリカ黒人父とハンガリー人母を持つピアニストの演奏に戦慄に似たショックを覚えました。その演奏には「こう弾くべき」とか「音楽史から考えてこうあるべき」というものが全くなく、真っ白なキャンバスに彼の思ったままの音楽が何の躊躇もなくぶつけられていたからです。

翌年、Watts 氏が再来日し、私はリサイタルを聴いた後、楽譜にサインをもらおうと、大勢のファンに混じって楽屋口に並びました。そしてサインしてくれている時何気なく「私のピアノを聴いてほしい。」とつぶやきました。勿論本気で考えて言ったわけではなく、そんな言葉は笑顔と一緒に流されることは当たり前のことでした。ところが Watts 氏は「ちょっと待って」と言い、マネージャーに何か話し、「私はマネージメントを通さないと何もすることが出来ないけれど、公開レッスンなら可能だと言われたが。」と言ってくれました。そこに偶然アメリカのピーボディー音楽院の Watts 氏の同門の桐朋の先生がいらして、「それなら私の生徒でも聴いてほしい生徒がいます。」と言い、また偶然にも銀座のヤマハホールの館長もいて、「それならホールを無償でお貸しします。」と言ってくれ、5分位の間に、受講生も聴講生も無料の公開レッスンの話が出来上がってしまったのです。

その夢のような公開レッスンが終わった後、「来年の夏にザルツブルクの音楽祭に招かれているので、

もしザルツブルクに来てくれるならまたレッスンできるけれど。」と言ってもらい、私は両親に「成人式の着物はいらないから、飛行機代を出して！」と頼み込み、念願通り2か月間のザルツブルクの音楽祭、Watts氏のレッスン、夏期講習参加をすることができました。

結果から言うと、その時に講習会でレッスンを受けた Seemann 先生にドイツで勉強することを強く勧められ、その時には「桐朋を卒業して、奨学金をもらわなければ経済的に無理。」と帰国しましたが、幸い卒業と同時にロータリーの奨学金をいただけたので、それからの6年間ドイツで勉強することになりました。



終了演奏会の後 Seemann 先生と

そのザルツブルクでの2か月間、ドイツでの6年間、深い絆を持った方たち、一期一会で助けてもらった人たち、思い出したら切りがありませんし、その感謝の気持ちが ISGG の中で、できるだけ日本に来てくれた方々の助けになりたいと思っている気持ちに繋がっていると思います。

今回はザルツブルクでの思い出を少々。

20歳でザルツブルクに行ったときにはドイツ語も英語も片言、インターネットなど想像もできない時代で外国の情報もあまりなく、何もかも手探りでした。

飛行機も南周りで、乗り換えながら30時間位かけてフランクフルトに到着しました。一番初めの乗り換えは北京空港。当時北京空港の税関は小学校の木の机を並べたような所で、頭上に毛沢東の大きな写真が掲げられているのが印象的でした。それから、確かバーレーンではまだ軍港しかなく、空港到着前に飛行機のカーテンを全部閉めるようにアナウンスがあり、両側に銃を掲げた兵士たちが並んでいる通路を通して乗り換えをした記憶があります。ザルツブルクでの6週間は楽しく、順調で、困った思い出はあまりないのですが、そのあと2週間オーストリア、イタリア、ドイツを一人旅する計画を立てていました。わからないことだらけのハチャメチャ旅でしたが、それなりに楽しく、でもとても疲れ、最後にミュンヘンまで来た時には「早めにフランクフルトに行って日本に帰る飛行機に乗り遅れな

いようにしなくちゃ。」とばかり考えていました。

そしてミュンヘンの駅でサラミが挟まっているパンを買い、ホテルで食べて寝付いたころ、めちゃくちゃな痒みで目が覚めました。体も顔も真っ赤に腫れあがっているような蕁麻疹！今でもこんな蕁麻疹は見たことも経験したことがないようなひどいものでした。言葉もわからない、知り合いもない外国でのこと、翌日はフランクフルトに行く予定の夜のこと、どうしようもなくそのままフランクフルト行きの電車に乗りました。



居酒屋で何故かリンゴジュースのビンを握りしめて得意顔。

そこでたまたま同じコンパートメントに乗り合わせた女の人が私の顔を見て、

「どうしたの？どこに行くの？私はフランクフルトで

教師をしているけれど、薬をつけなくてははいけない。生徒の家で小さなホテルをしているところがあるからそこに連れて行ってあげる。フランクフルトの駅の周りには女の子が歩き回ってはいけない通りがあるから気を付けなければ。」と言って、それから日本に帰るまでの3日間、学校から帰ると町を案内してくれたり、名物のリンゴワインを飲ませてくれたり、昼間の観光計画をたててくれたり、お世話役を買って出てくれたのでした。

前述の何でもないつぶやきを聞き逃さないで夢を現実に変えてくれた Watts 氏、ドイツでの勉強を強く勧めてくれ、アメリカのロータリー財団が違う留学先を指定した時、アメリカの本部に手紙を書き希望通りフライブルクで勉強できるように計らってくれた Seemann 先生、私のドイツ人の印象を明るいのにしてくれた電車の中で出会った女性など、人との出会いが私の人生の岐路に大きな役目を担ってくれました。

次の機会には6年間のドイツ生活の中での出会いを思い出して書いてみたいと思います。

ザルツブルク近郊の農家で



ミュンヘンフィルのコントラバス奏者の家に
招かれて。
コントラバスに初挑戦。

極東の神秘の国で真（まこと）の 自分に会うことを望んだ若者 —第一話—



会員 榊原 教子

とにかく、人は理想、そして理想の自分になることを追い求めるものだ。今のままの環境に身を置けば安全が保証されていると知っていても、あえて他の人とは異なる人生を選び、危険な場所へ行ったりす

る。すでに存在している道、わだちから外れて進んでみれば、高潔な自分、夢のような人生、揺るぎのない自尊心に出会えると信じて。

アーネスト・サトウ＊1 もそのような者たちの一人だった。

彼は、日本へ行くため、母国出発する直前に、「東禅寺襲撃事件」＊2
が起きた知らせを受けても、日本へ行く意志を翻さなかったのだから。
冒険に危険はつきものだ。いや、危険がなかったら冒険ではない。



アーネスト・サトウ

頭脳明晰であったアーネスト・サトウは、ミル・ヒル スクールを首席で卒業、ケンブリッジのトリニティ・カレッジに進学する予定だった。

しかし、運命という訪問者がやって来て、ちょっと彼の肩をたたいて、アーネスト・サトウという船の進む航路の方向を大きく変更させた。

ある日、アーネストが家に帰ると、兄が図書館から、ローレンス・オリファントの「エルギン卿の中国・日本」という本―これは、事実上、ジバングでの冒険へのチケットだったのだが―を借りてきていた。アーネストは、その本を兄から借りて読み、瞬く間にそこで描写される日本の魅力に取り憑かれ、どんなことをしても、その神秘的な国へ行こうと決心した。そして、彼はケンブリッジへ行くのをやめ、外務省の通訳生試験に応募し、首席合格した。

そして、19 才のアーネストは、日本語通訳として、イギリス公使館で働くために、日本の地に降り立った。

こうして、アーネスト・サトウは、世界史上、類を見ない、類い稀な革命の中に、若くして身を投じて行くことになるのである。

彼は、その聡明さゆえに日本の情勢を正確に読み取り、的確に判断してゆく。

しばらくして、彼は、海外の者ならではの視点で、真実を見抜き、歴史の歯車を動かすことになる。

1866 年、アーネストは、「ジャパン・タイムズ」に匿名、無題で記事を投稿したのだ。彼は、日本人にじれったく感じていたのだろうか？

これは、後に、「英国策論」と呼ばれるようになる。

彼の上司、イギリス公使パークスの同意を得ないで、彼が独断で投稿したと言われる。

骨子は次の通り。

- 1 将軍は、主権者ではなく、諸侯連合の首席に過ぎず、現行の条約は、その将軍とだけ結ばれたものである。よって、現行条約のほとんどの条項は、将軍には実行できないものである。
- 2 独立大名たちは、外国との貿易に大きな関心を持っている。
- 3 現行条約を廃し、新たに天皇及び、連合諸大名たちと条約を結び、日本の政権を将軍から、諸侯連合に移すべきである。

アーネストは、日本の文化の中のまどろっこしい修飾、習慣を正当化、美化するための無駄な言葉の山、無数の形骸化した儀式の中から、真実を見極め、日本社会の政治システムの現実の骨格、問題点を浮き彫りにした。

多くの日本人が、薄々感じていた事柄を、アーネストは日本人でなかったがゆえに、何のためらいもなく、冷静に言葉にしたのだ。そして、雄藩連合ー薩摩、長州、土佐などの呼び名ーにいる実力者たちは、自分たちの考えが、日本の外の客観的な視点で、また先進国の視点から裏づけられたことを見て、勢いを得ていくことになる。

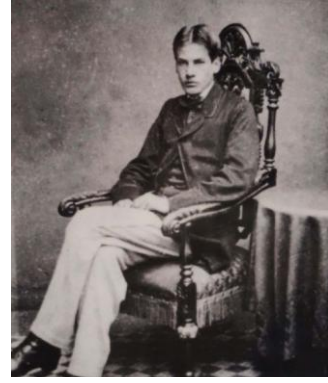
そして、この文章は日本語に翻訳、写本され、大名、その家臣たちに広く流布され、ついに、大坂(当時は大阪ではない)、京都のすべての書店に売り出されるようになった。西郷隆盛もこの書から引用する。時代の流れに明るい人なら、必ず読まなくてはならない本になったのだ!

「翌年、わたしが会った諸大名の家臣たちは、その写本を通じてわたしのことを知っており、好意を寄せてくれた。」と、アーネストは語っている。

従来、イギリス人を敵視していた日本人が積極的に好意を示すようになったのだ。パークスたち、イギリス公使館の者たちは、薩摩藩主の招待

を受け、薩摩藩に行くことになった。

この「英国策論」は、明治維新の原型になるような文、という評価もある。



アーネストは、日本の政治システムの骨格を見抜き、どこを押せば(何を述べれば)、歴史の歯車が動くのかを理解していたのではないだろうか。もしそうであれば、このような者を天才というのだ。

翌年、徳川慶喜は、大政奉還をする。

これは、とんでもないことだ。

この時、アーネストは22才であった。現代の大学生と、ほとんど同じ年齢だ。

例えて言うなら、大学生が卒論で、これからの日本が取り入れるべき新しい政治システムを論じ、それが出版、瞬く間にベストセラーになり、世論の賛同を得る。そして、維新を起こしてしまった、というような状況だ。

あるいは、大学生が、Youtubeに「とある一英国人が、日本を良くする新しい政治システムについて考えてみた♪」というテーマで、動画を投稿。たちまち再生回数が、とんでもない数に達し、世論を形成。世界を動かしてしまう、というような状況だ。

明治維新の大きなきっかけをイギリス人が作ったと聞いて、気分を害する人もいるかもしれない。しかし、議会制度は、英国など海外から入ってきている。これは、はっきりしている。海外からの刺激を受けることで、明治維新の志士たちは、自分たちが何者であるかを理解し、何をすべきかを理解したのだ。

この出来事によって、アーネストの存在は、志士たちの間で特別な意味を持つていく。

民族の違いを越えて、日本の武士たちが、命がけで彼を守る、というドラマに繋がっていくのだ。

国境を越えて通用する意見、真理というものはあるものだ。

どのようなドラマが起きたのかは、また次回。

＊1 サトウという姓は、スラヴ系の希少姓とのこと。近い祖先に日本人はいないようだ。ずっと昔に逆のぼるとわからないと思うが…。

＊2 東禅寺襲撃事件 東禅寺にあった、イギリス公使館が、攘夷を掲げる過激派武士たちに襲われ、領事のモリソン、書記官のオリファントらが負傷した事件。オリファントは、この時の怪我がもとで、来日したばかりであったが帰国した。

参考文献：「アーネスト・サトウ伝」バーナード・メリディス・アレン 著」

椎の実



会員 石田泰嗣

市内、馬場町に「本郷公園」がある。ここらの一帯は私が子供の時田圃であった。（その後、退職後に案内人会に入って、この田圃が八幡野の肥田家のものだったことを教わった）確か6年生のころにこの公園ができたと思う。私は鉄棒にぶら下がりて体を振ったり、逆上がりをしたりして遊んだものだ。時々、今も公園にやってきて、鉄棒にぶら下がる。実は今日（9月24日）鉄棒のそばに椎の実が落ちていて10粒ばかり拾ってきた。子供の時はおやつ代わりに食べたことを思い出す。それで思い出したイベントがある。今は案内人会を休んでいるけど、10月の第一土、日に大室山のさくらの里で「クラフトの森」が行われる。案内人会もそれに参加して大室山の案内と野山でとれた「アケビ」「サルナシ」などのほか、会員が栽培した「沖縄（琉球）スズメウリ」や野菜などを販売したりする。ほかに椎の実や「マテバシイ」の実をフライパンで炒って、こちらは無料でサービスしたりす

る。私もこのイベントは気に入っていて、サルナシやガマズミ、アケビ取りに協力したものです。会員のIさんは「茅バッタ」の作成が得意でその作成と販売に精を出します。この茅バッタは茅が枯れてもドライフラワー同様に何年も長持ちするのでお客さんに喜ばれる。このイベントも今年は中止です。コロナウイルスは私たちの日常生活にほんとにいろいろと関わってくれますね。

〔事務局だより〕

小西前副会長より事務局の役割をバトンタッチしてあっという間に数か月が過ぎました。世の中はコロナ禍で当会もたぶんにもれずガイド活動は全面休止の状態ですが、こういう状況のなかでも何とか伊東の活性化に貢献し、又、当会の存在意義を高める事ができないかと会員間で相談するなか、英語講演会の開催に至りました。

残念ながら会場はコロナを考え40名弱の参加者に限られますが、伊東市民の皆さんが気楽に英語のプレゼンテーションを聞き、その雰囲気を楽しませる事ができれば会員一同、開催に尽力したかいがあったと思います。

講演会終了後は引き続き恒例の当会忘年会ですので、第2回英語講演会(?)に向け大いに英気を養いましょう。



伊東市善意通訳の会
Ito Systematized Goodwill Guide



Scientific Beta
ientif
EC Risk (moder
Sci Beta

第1回英語講演会

伊東市民の皆様へ送る或軽で
楽しい英語のプレゼンテーション!

講師紹介: ポール A. ホフ (Paul A. Hoff)
HSBC, London Stock Exchange, EDHEC Business School等永くに関わり国際金融分野で活躍。又、日本クラブ、東京アメリカンクラブ等著名な団体メンバー 現在、伊東市赤沢在

講演テーマ
伊豆に住む外国人: 昔と今

令和2年12月15日(火)
伊東市役所8階大会議室
入場無料

開場: 2時
開演: 2時半
講演時間: 約60分
(その後30分程の質疑応答
英語・日本語でどうぞ)
終演: 4時

予約(必須):
090-3308-3220(ヌシハラ)
会場は定員の50%以下に抑えておりますので
予約のない方のご入場はお断りいたします。

簡単な英語に少しの日本語を加えて解りやすく
楽しいプレゼンテーションです。ぜひ或軽にご
参加ください。

新型コロナウイルス感染防止対策にご理解とご協力をお願いします。体調不良・不安のある方はご来場をおやめください。マスク着用・入場時の検温・手の消毒にご協力お願いいたします。

主催: 伊東市善意通訳の会
後援: 伊東観光協会 (株)CVA (株)伊豆新聞本社

〔編集後記〕

台風 15 号、19 号とこれまでにない大型の台風に見舞われたのは 2019 年秋、去年のこと、今年、日本では、2 月に横浜港寄港の大型クルーズ船に端を発したコロナ禍で大騒動、現在に至っています。日本では幾分下火になったとはいえまだまだ、アメリカ、フランス、ブラジル、・・・は、むしろ増加傾向にあり、世界中に多くの陽性者がでて予断を許さない状況にあります。

わが NEWSLETTER も、101 号、102 号とコロナ関連の記事にあふれていましたが、今回は一変。

「80 日間世界一周航路」さすが、海上で活躍されてきた菊池さんのお話し、スケールが違います。小西さん、お世話になりました。私と ISGG の関りは小西さんの 2 分の 1 ほどにしか過ぎませんが、いつも小西さんを頼りにしてきました。これからも顧問で頑張ってください。K's サロンで、30 カ国余の外国の旅行者が集って忘年会のできたのは最高でした。コロナのため当分お休みなのは残念です。稲葉会長の「人生の分岐点と人との出会い」若き稲葉会長が元気に外国を闊歩しているお姿が目に見えるようです。榊原さんの記事の中、「東禅寺襲撃事件」恥ずかしながらネットで調べさせていただきました。

石田さんご案内の「クラフトの森」楽しい催し物、面白そうです。来年を期待しましょう。

今回も会員の皆様の力作のおかげで無事発行できましたこと、ありがとうございました。(HS)

伊東市善意通訳の会 (ISGG)

会長 稲葉 尚子

(事務局) 414-0023 伊東市渚町 2-48 伊東観光番内 小西恒男

電話・FAX : 0557-36-9828

e-mail : tsunemina@gmail.com

<http://itosgg.info/>

(編集委員) 稲葉尚子、曾我廣子、加藤達雄